



新芽が
“迎えるチカラ”
成長中

今回は、来訪者がよい旅ができるようにと、東紀州で奮闘する若いチカラに会いに行きました。
熊野市の市街地から車で約15分、山間集落の神川町で“地域おこし協力隊”として活動する北村美穂さんは、東京から熊野へとやって来ました。

“地域おこし協力隊”とは、地方自治体から委嘱を受けた隊員が都市部から移住し、様々な地域協力活動をする、総務省の事業です。

熊野市神川町では、清流と山肌の風景、春には正倒されるようなサクラの舞宴、そして昭和30年代築の昔なつかしい木造の神上中学校旧校舎が暖かく迎えてくれます。北村さんは現在、ブログやマップづくりなどに取り組むほか、この校舎を訪れた人と地域住民が、自然な形で交流できないかと知恵を凝らしています。「神川の風景の写真展や、落成当時の卒業生たちを集めて同窓会もしてみたい！」頭のなかの黒板には、色とりどりの未来予想図が描かれているようです。

でも…言葉は続きます。「訪れた人も迎える側も無理をするのは楽しくないし、長く続かないと思う。地域のキャパシティに見合った“続く交流”を町の人と一緒に考えていきたい。」喜ばれるおもてなしをするためには、内側に向かって目を向ける必要がある、そんな気がしました。

一方、東紀州生まれの“迎えるチカラ”も各地で活躍中です。そのうちの一人、尾鷲市の内山裕紀子さん(くまの体験企画代表)は、希望・目的に合わせた“完全オーダーメイドの旅”を個人から団体まで提供しています。エコツーリズムのなかで「帰って感動を話したくなるような体験」を楽しんでほしいという



内山さんですが、同時に、迎える体制を維持するためには“地域の活動団体との連携、地元への経済効果、案内する人が仕事になるような仕組みも必要”だと言います。自分が先遣になり、この地域でガイドが若い人たちの仕事にもなれば、そんな思いで各地のセミナーなどにも講師として参加する現代の“熊野比呂尼”内山さんを、みなさんも見かけることがあるかもしれません。

“迎えるチカラ”は形も色々。観光や地域づくりに興味があった鎌田誠君は、埼玉から紀北町古里の民宿・紀伊の松島へインターンとして来ました。掃除やVIPでの情報発信など、毎日忙しいなかでも大事にしているのは「お客さんにとってその一度が全て、自分の気持ちは浄さ洗みしても仕事にムラをださない」こと。なんだか背筋がピンと伸びました。

旅の方法も多様化し、それを迎える方法としてコレが正解、というものはありません。しかし取材のなかで、受け入れる側がそれを長く続けられるための方法、人材が大切だと感じました。旅人を迎える活動は若い世代へも着実に広がっています。現在芽かかれた多くの種が新しい芽を出し、きっと未来の地域づくりを支えていってくれることと思います。



熊野市神川町の地域おこし協力隊員

